

# 短期大学における SDGs 教育の意義 —「生活と SDGs」の授業実践から

The Significance of SDGs Education at Junior Colleges:  
From the Classroom Practice of "Life and the SDGs"

築瀬千詠、二見総一郎  
Chie YANASE、Souichirou FUTAMI

湘北短期大学  
Shohoku College

【抄録】短期大学における SDGs 教育の意義について、2022 年度の湘北短期大学における「生活と SDGs」の授業実践および学生の授業後アンケートを資料として検討を行った。資料の検討に先立ち、文部科学省と日本ユネスコ国際委員会の資料および先行研究から、短期大学の教育課程において、SDGs の基礎的な「スキルとコンピテンシー」、「知識と理解」を深く修得させることは、社会課題を「自分事としてとらえること」や「その解決に向けて自ら行動を起こす力があること」につながり、「21 世紀型市民」「持続可能な社会の創り手」の育成に大きく寄与することが確かめられた。「生活と SDGs」を通して学生たちは、ただ SDGs に関する基礎的な知識を得たにとどまらず、自身の日常生活と SDGs の各目標を繋げて思考し、社会課題に取り組もうとする姿勢が涵養されていた。これらの学生の変化は、座学のみでなく、視聴覚教材の使用や外部講師による講演、ゲームなどを用いたアクティブラーニングなど、多様な学びの形態が学生の学びの質を高めたことが背景にあったと考えられる。

【キーワード】 SDGs、ESD、短期大学、授業実践、アンケート、持続可能な社会、アクティブラーニング

## 1. はじめに

### 1.1 本稿の目的と構成

本稿は、2022 年度の湘北短期大学における「生活と SDGs」の授業実践および学生のアンケートから、短期大学における SDGs 教育の意義を考察するものである。

2015 年 9 月に国連総会で持続可能な開発目標（以降、「SDGs」と表記）が全会一致で採択されてから 8 年が経過する 2023 年は、2030 年までの 15 年の道程のちょうど折り返しにあたる年である。この折り返しの年に先駆けて、湘北短期大学生生活プロデュース学科では、2022 年度に 1 年生向けの選択科目「生活と SDGs」を新設し、SDGs 教育を教育の根幹に据えるカリキュラム改革をスタートさせた。本稿ではこの「生活と SDGs」の授業実践および学生のアンケートを考察の対象とする。

本稿の目的達成のため、まず第 1 節では、日本における SDGs 教育の現状と先行研究を概観

し、短期大学における SDGs 教育の意義を検討する。続く第 2 節では、新科目「生活と SDGs」をどのようなカリキュラムで行い具体的に何をしたのか、実践内容を確認する。それをもとに第 3 節では、「生活と SDGs」授業後アンケートを用いて、学生が授業から何を学んだのか、何が学生の学びを促進したのかを分析する。最後に第 4 節で結果の考察と課題を示し、本稿の議論を整理したい。

### 1.2 持続可能な開発目標のための教育の現状

文部科学省は 2016 年に「持続可能な開発のための教育(ESD) 推進の手引」を作成し、2017 年の幼稚園、小学校、中学校の学習指導要領改訂にその内容を反映させた。改訂された学習指導要領の前文および総則には、教育の目的として「持続可能な社会の創り手」の育成が掲げられており、日本ユネスコ国際委員会は「ESD が新学習指導要領全体において基盤となる理念として組み込まれた」と解釈している<sup>1</sup>。

<sup>1</sup>文部科学省「持続可能な開発目標のための教

育(ESD) 推進の手引」、2022 年、

それでは「持続可能な社会の創り手」とは具体的にどのように定義づけられているのか。本手引では、ESDとは「地球規模の課題を自分事として捉え、その解決に向けて自ら行動を起こす力を身に付けるための教育」と定義されており、さらに「地球上で起きている様々な問題が、遠い世界で起きていることではなく、自分の生活に関係していることを意識付けることに力点をおくもの」であることが強調されている<sup>2</sup>。すなわち、「持続可能な社会の創り手」として求められる能力は、SDGsの課題に対して「自分事としてとらえること」「その解決に向けて自ら行動を起こす力があること」「自分の生活に関係していると意識していること」として掲げられているのである。

日本ユネスコ国際委員会は、学習指導要領で「生きる力」として掲げられている①全ての教科等の目標や内容を実際の社会や社会の中で生きて働く「知識及び技能」、②未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」、③学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱が、「持続可能な社会の創り手」の育成を目標としていると解釈しているのである。日本ユネスコ国際委員会の解釈にもとづけば、日本の初等・中等教育には基盤理念としてESDが組み込まれており、学習指導要領の「生きる力」は「持続可能な社会の創り手」の育成を目指したものと考えることができるのである。

### 1.3 SDGs達成のための大学教育の役割

それでは、初等・中等教育の理念に組み込まれたESDを、大学はどのように引き取るべきだろうか。

2012年に国連事務総長が設立を発表した「持

続可能な開発ソリューションネットワーク」(以降、「SDSN」と表記)は「持続可能な社会を実現するため、学術機関や企業、市民団体をはじめとするステークホルダー連携のもと解決策を見出すとともに協働して実践していくことを目的としている世界規模のネットワーク」である。その日本支部であるSDSN Japanは、2017年にガイドライン「大学でSDGsに取り組む」を翻訳ならびにホームページに掲載し、SDGsの目標達成における大学の意義を示した。

このガイドラインにおいて、SDGs達成のために大学ができることが「研究」「教育」「業務とガバナンス」「外部に向けたリーダーシップ」の四つのセクションに分けて提示されている<sup>3</sup>。ここでは特に「教育」における役割に注目して検討する。

「教育」に関するセクションでは、大学の役割は大きく四点にまとめられている。すなわち、①「SDGsの課題を理解し解決するための知識、スキル、動機づけを学生に提供すること」、②「若者の能力を強化し、動機づけること」、③「SDGsソリューションを実装するための十分な学術的または職業的トレーニングを提供すること」、④「開発途上国の学生や専門家のキャパシティ・ビルディングの機会を増強し、SDGsに関する課題に取り組んでもらう」ことである。この中で、一つ目の「SDGsの課題を理解し解決するための知識、スキル、動機づけを学生に提供する」の項目においては、さらに細かく以下の三点にわたり記述されている。

すべてのSDGsに関連するクロスカッティングなスキルと、鍵となるコンピテンシー：システム思考、批判的思考、自己認識、統合された問題解決、予測的、規範的、戦略的お

カデミアセクターへのガイド」、2017年、[http://sdsnjapan.org/wp-content/uploads/2017/11/University-SDG-Guide\\_web\\_japanese.pdf](http://sdsnjapan.org/wp-content/uploads/2017/11/University-SDG-Guide_web_japanese.pdf) (2023年1月7日最終確認。)

[https://www.mext.go.jp/content/20210528-mxt\\_koktougou01-100014715\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210528-mxt_koktougou01-100014715_1.pdf) (2023年1月7日最終確認)。

<sup>2</sup> 同上、pp.1-2。

<sup>3</sup> SDSN Japan/蟹江憲史監修「オーストラリア、ニュージーランド、太平洋版 大学でSDGsに取り組む 大学、高等教育機関、ア

よびコラボレーションの能力。創造性、起業家精神、好奇心と学習スキル、デザイン思考、社会的責任、パートナーシップ能力、学際的な環境で快適さを感じられること<sup>4</sup>。

各SDGsの主題分野の基本的な理解<sup>5</sup>。

SDGsフレームワーク自体とその目的と使用方法に関する知識と理解<sup>6</sup>。

この提言からは、SDSNが大学に求める教育的な機能として、まずはSDGsの基礎的な「スキルとコンピテンシー」、「知識と理解」が重要であることがうかがえる。初等・中等教育では「持続可能な社会の創り手」の育成のために、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」と広い目標が設定されていたが、大学におけるESDは、「各SDGsの主題分野の基本的な理解」「SDGsフレームワーク自体とその目的と使用方法に関する知識と理解」といった、SDGsに直接関係する深く専門的な知識を修得することが目指されているのである。そして大学におけるESDでは、これらの基礎的な知識と理解を土台とし、能力の強化と動機付け、学術的または職業的トレーニング、課題への取り組みへと応用をしていくことが求められている。

#### 1.4 短期大学がESDを行う意義

短期大学は四年制大学とは異なり、2年間という限られたカリキュラムの中で学生の職業専門性を養う教育を行う必要がある。その限られた時間の中で、何を目標として学生にESDを行えばよいのだろうか。

短期大学におけるSDGs教育の方向性については、甲斐荘(2021)にて詳しく検討されている。甲斐荘は「大学でSDGsに取り組む」を引

きながら、短期大学の特色を「就学期間が2年間と短く、またゼミナール形式で専門分野を絞った少人数での活動を行い難い」と定めている。そのうえで「SDGs達成への貢献の領域を定めて取り組む必要がある」として、取り組むべき領域を、①持続可能な消費への貢献(SDGs目標12)②生涯学習の実現(SDGs目標4)③市民参加への働きかけ(SDGs目標17)の3点にわたって挙げている<sup>7</sup>。

①持続可能な消費への貢献について甲斐荘は、四年制大学よりも短期大学が女子学生の比率が高いことを挙げながら、「消費行動において男性よりも大きな影響力を持つ女性に対して「持続可能な消費」「エシカル消費」への理解と共感を持たせることは、SDGs達成のための重要な観点である」と述べている<sup>8</sup>。また、②生涯学習の実現について甲斐荘は、短期大学の卒業生が継続的な学習の場を得たいというニーズに対し、「四年制大学の教育とのカリキュラムの接続性を高めるための学内連携や、社会人コースの設立による卒業生の生涯学習の支援を行う」ことが重要だと述べている<sup>9</sup>。最後に③市民参加への働きかけについては、「SDGsへの市民参加を容易とするために、公開講座などによる情報の提供、ワークショップなどを通じた体験の場の提供が求められている」と言及している<sup>10</sup>。

甲斐荘が掲げる三つの取り組むべき領域の中で、現役の学生に対する教育の内容は①持続可能な消費への貢献に限られている。しかしながら、初等・中等教育で「持続可能な社会の創り手」を目指して育成されてきた学生たちを、消費主体としての側面のみを強調して教育しようとするのは、いささか領域を限定しすぎているのではないだろうか。また短期大学において女子学生の比率が高いことは事実であるが、主に家事を担っているのが女性であるという前提に立つ議論は、現状を追認する議論であり、

<sup>4</sup> 同上、p12。

<sup>5</sup> 同上、p12。

<sup>6</sup> 同上、p12。

<sup>7</sup> 甲斐荘正晃「短期大学におけるSDGs取り組みの方向性について」『大妻女子大学家政系研

究紀要』57号、2021年、pp.107-117。

<sup>8</sup> 同上、p110。

<sup>9</sup> 同上、p110。

<sup>10</sup> 同上、p111。

SDGsの五番目の「ジェンダー平等を実現しよう」という目標にそぐわないものであると考えられる。

そもそも短期大学に求められている機能としては、2014年に出された中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」に関する「短期大学の今後の在り方について」（審議まとめ）において詳しく記載されている。この審議まとめにおいて短期大学に期待される機能としては「i 専門職業人材の養成」、「ii 地域コミュニティの基盤となる人材の養成」、「iii 知識基盤社会に対応した教養的素養を有する人材の養成」、「iv 多様な生涯学習の機会の提供」、の四点が挙げられている。

審議まとめの「iii 知識基盤社会に対応した教養的素養を有する人材の養成」の中では、「知識基盤社会」を支える人材を「21世紀型市民」と称し、「専攻分野の専門性を有するだけでなく、幅広い教養を身に付け、高い公共性、倫理性を保持しつつ、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、改善していく資質を有する人材と定義」している<sup>11</sup>。ここで示される「21世紀型市民」は、先に見た学習指導要領で示されている「持続可能な社会の創り手」と親和性の高い用語として用いられていると解釈することができるだろう。

このように考えた時に、「専攻分野の専門性を有するだけでなく、幅広い教養を身に付け、高い公共性、倫理性を保持しつつ、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、改善していく資質を有する人材」として、SDGsの基礎的な「スキルとコンピテンシー」、「知識と理解」を備えていることは重要な意味を持つと思われる。この審議まとめでも言及されているように、短期大学は「経済的に厳しい中で短期大学に進学してくる学生も多く、早く社会に出て働きたいという学生のニーズに応えながらこの「21世紀型市民」を育成することが求められている。

だからこそ、学生たちに、SDGsの基礎的な「スキルとコンピテンシー」、「知識と理解」を深く修得させることが、短期大学におけるSDGs教育のまず目指すべき目標であることを確認したい。演習を含めた応用的な科目を展開することはもちろん重要だが、その先駆けとして、世界の課題について深く学び、「自分の生活に関係していると意識していること」によって、「自分事としてとらえること」「その解決に向けて自ら行動を起こす力があること」につながっていくと考えられる。

以上の考察をふまえ、SDGsの基礎についてのどのように授業を行ったか、その具体的な実践の記録を以下の節で整理する。

（二見総一郎）

## 2. 新科目「生活とSDGs」の実施報告

### 2.1 湘北短期大学の教育課程でSDGsを扱う意義

学校法人ソニー学園湘北短期大学は、1974年にソニー株式会社の寄付により神奈川県厚木市に設立された総合短期大学である。2023年1月現在、総合ビジネス・情報学科、生活プロデュース学科、保育学科の三学科を擁し、2学年合計900名あまりが在学している。各学科の専攻に沿った専門教育科目の他、語学科目や、リベラルアーツ科目、キャリア教育科目など、地域に根差した高等教育機関としての役割を担うに相応しい共通教育のカリキュラムも備えている。

開学当時、ソニー株式会社ファウンダーでソニー学園の元理事でもあった井深大氏が「私の期待する大学教育」の中で述べた言葉が建学の精神となっており、「社会でほんとうに役立つ人材を育てる」ことを教育理念に掲げ今日に至っている。

高校を卒業し社会に出るまでの2年間に、短期大学はどのような教育を授けるべきか。この問いに対する答の一つが、複雑で正解のないこの時代を生きて行かねばならない若者に、社会課題を解決するための知識や行動力が身に付く

<sup>11</sup> 文部科学省「短期大学の今後の在り方について（審議まとめ）」、2014年、[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/s](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/s)

[hingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2014/09/19/1351965\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/s_hingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/09/19/1351965_1.pdf)（2023年1月7日最終確認）。



教育を行うこと、すなわち「持続可能な社会の創り手」となれるよう教育することではないだろうか。1章で述べたようにこの「持続可能な社会の創り手」と、知識基盤社会を支える「21世紀型市民」とは親和性が高く、「社会でほんとうに役立つ人材を育てる」という湘北短期大学の教育理念とも合致するものである。

2.2 湘北短期大学における SDGs 教育の沿革

「生活と SDGs」の内容にうつる前に、その前史として湘北短期大学における SDGs 教育の沿革を確認したい。

2015年9月に国連総会で持続可能な開発目標が採択されて以降、湘北短期大学のシラバスで SDGs という文言が使われたのは2020年度が最初である(表1)。その前年度、2020年1月開催の生活プロデュース学科卒業研究発表会で、筆者のゼミナールの学生たちが「女子教育とジェンダー平等」をテーマに SDGs を全面的に打ち出してポスター発表とプレゼンテーションを行った。

もともと、食・住まい・医療・子どもと家族など様々な専攻コースの学生が所属する筆者のゼミナールでは、「映画で学ぶ社会学」を通年テーマとし、文部科学省特選・選定作品の中から人種差別や女性活躍などを扱った作品を数本鑑賞し、学生各々が興味関心を持ったテーマを調べ、プレゼンテーションを行ってきた。後期に入り、卒業研究に着手する際、前期の授業で学んだ世界の多様な社会課題を考えるにあたり、ものの見方の指針として SDGs を使ってみることとなった。

2019年当時、学生たちの SDGs 認知度は殆どゼロに近く、まずは SDGs を知ることからスタートし、図書館のスタッフによるレクチャーや、国連広報センター、日本ユニセフ協会などのサイトも参考にしながらテーマを絞り込み、発表内容をまとめていった。

卒業研究発表会の本番では、グループで研究を進めてきた4人の学生が登壇し、SDGsの目標4(質の高い教育をみんなに)と目標5(ジェンダー平等を実現しよう)を柱としながら、目標1(貧困をなくそう)や目標3(すべての人に健康と福祉を)との関連性にも言及し、世界の女子教育の状況や学校がおかれた過酷な現状を調べ、女子教育の充実によって実現できる他の目標と

の関連性のみならず、日本で学ぶ自分たちができることは何かという観点からも考察を行った。これが、湘北短期大学で SDGs を意識した学びの嚆矢であったと言える。

表1 湘北短期大学のシラバスで SDGs の文言が使われた科目(2016年度以降)

\*印は筆者らが開講している科目

年 度	科 目 名
2020年度	現代女性の社会学*、ショッピングマネジメント論
2021年度	ゼミナールI*、ゼミナールII*、現代女性の社会学*、ショッピングマネジメント論、SNSとダイバーシティ
2022年度	ゼミナールI*、ゼミナールII*、現代女性の社会学*、ショッピングマネジメント論、SNSとダイバーシティ、生活とSDGs*

出所：筆者作成

この経験を経て、2022年度より湘北短期大学としては初めて SDGs を冠した科目として「生活と SDGs」を開講するに至った。

2.3 「生活と SDGs」の概要

高等学校では、2022年度より新しい学習指導要領に基づく教育課程が始まり、その前文と総則には「持続可能な社会の創り手を育むこと」が明記されたが、高校の授業での SDGs の扱い方や本学入学者の理解度には違いがあることが予想されたため、新科目の開講初年度は必修ではなく選択科目とし、授業の構成や教材については、担当教員間で学生の理解度を確認し、協議しながら進めることとした。

まず、4月の時点で新1年生が高校時代に SDGs をどの程度学んでいるかについて簡単なアンケート調査を実施した。



図1 使用したテキスト

生活プロデュース学科の新入生 97 名を対象に、高校での SDGs 履修経験の有無について尋ねたところ、「履修経験あり」が 54%、「履修経験なし」が 37%、「不明」が 9%であった。高校に「SDGs」という教科があるわけではないため、SDGs の扱い方は様々であった。例えば、ある学年において探究学習のテーマに SDGs を据え、学年全体で SDGs17 の目標を調べて発表する高校もあれば、高校 3 年間を通じて SDGs の調べ学習を継続し、1 年ごとにステップアップして探究を深めていく高校もあった。また、高校 3 年間の授業で全く SDGs に触れていないという学生もいた。

高校での履修方法について尋ねたところ、多くの高校では、SDGs17 の目標を一つだけ選ばせて調べる方法がとられていたが、SDGs は複数の課題が複雑に絡み合っている存在していることから、「生活と SDGs」では、関連性のある目標を組み合わせて学んでいく方法をとることとした。

2022 年 4 月、生活プロデュース学科の共通選択科目として 1 年次前期に開講し、2 名の教員が 1 クラスずつ担当した。2 クラスともシラバスは同一としたが、履修学生の専攻コースや高校までの履修経験、興味関心や理解度に応じて、使用する資料や動画教材を変えるなどの柔軟な対応を行い、「SDGs は難しい」と思わせないことを念頭に、学生たちが SDGs をできる限り「自分事」として考えられるような工夫をはかった。

テキストは、「未来を変える目標 SDGs アイデアブック」(一般社団法人 Think the Earth 編著、蟹江憲史 監修、2018 年 紀伊国屋書店)<sup>12</sup>を採用した(図 1)。本書の構成は、それぞれの目標をインフォグラフィックとテキストで概略を説明したページと、二つの代表的なアイデアの事例を紹介したページで構成されており<sup>13</sup>、キーワードや問い、他の目標との関連性も知ることができる。さらに、17 の目標の下の 169 のターゲットや 232 の指標を検索できる QR コードも掲載されているので、学生が授業の後に主体的に調べることが可能で、事後課題や振り返りで活用していたケースも多かった。

また、受講生の約半数は高校時代に SDGs を履

修したことがない学生であることをふまえ、テキストや授業資料(パワーポイント)の文字情報だけでなく、動画教材を用いることにより、より理解しやすい授業展開をはかった。

SDGs に関する動画コンテンツは、YouTube などで検索すると多数見つけることができる。ただし、国連や外務省、環境省など公的機関が作ったものから、NPO、NGO、企業、個人が作ったものまで含めると多種多様である。短期大学の授業で教材として活用する動画を選択するにあたっては、各回の授業の目的に合致した良質な動画を用いることが重要であると考えた。そこで、SDGs.TV<sup>14</sup>が 2022 年 5 月に開講した研修会に担当教員が参加して公認ラーニングコーチの資格を取得し、授業で使える動画教材の選択肢を増やしたほか、SDGs.TV 代表の水野雅弘氏から動画の活用手法や事例を学ぶなど、教員側のスキルアップもはかって授業に臨んだ(表 2)。

表 2 授業で使用した動画教材の例

タイトル (長さ 分:秒)	制作	関連する SDGs
外務省×SDGs どれから始める? 未来のために (05:24)	外務省	6, 8, 10, 12, 14
SDGs って何だろう? (07:34)	国連食糧計画 (WFP)	1~17
廃棄食材で大人気のレストラン~INSTOCK (04:32)	Earthackers (Akihiro Yasui)	8, 12
循環するジーンズの楽しみ方~MUD JEANS (05:05)	Earthackers (Akihiro Yasui)	6, 8, 12, 17
ガール・エフェクト時計が進む (03:04)	国連広報センター	1, 4, 5
持続可能な美容サロンとは? (02:52)	Sustainable Salons	3, 6, 10, 11, 12

出所: 各種資料より筆者作成

「生活と SDGs」のシラバスには、到達目標として以下の 4 つを掲げた(表 3)。

憲史 監修、2018 年 紀伊国屋書店「未来を変える目標 SDGs アイデアブック」p5。

<sup>14</sup> <https://sdgs.tv/aboutsdgs-tv> (2023 年 1 月 3 日最終確認)。

<sup>12</sup>

<http://www.thinktheearth.net/jp/aboutus/> (2023 年 1 月 3 日最終確認)。

<sup>13</sup> 一般社団法人 Think the Earth 編著、蟹江

表3 「生活とSDGs」の具体的到達目標

1	国連のSDGs (Sustainable Development Goals) 17のゴールの内容を理解し具体的に説明できるようになります。
2	SDGsのものさしを使って、自分の周りの社会課題を見つけその原因や解決策の選択肢を考えられるようになります。
3	自分の意見を持ち、他者の異なる考え方を客観的に聞くことができるようになります。
4	SDGsの視点で社会や企業活動を捉える経験を重ねることにより、1年生後期のインターシップや就職活動にむけた心の準備ができます。

出所：湘北短期大学 シラバスより

まずSDGsの17の目標を知ること、それぞれの目標にはどのような課題があるのかを知ること、そして、それらの知識を使って社会課題を見る視野を広げ、卒業後の進路選択、すなわちキャリア教育にも繋げたいというねらいがあった。

また、それぞれの社会課題について、グループで話し合い、自分の意見をまとめて振り返りシートを提出するワークを全ての回で課した。他者の意見を知ることを通して、同世代の仲間がどのような意見を持っているのかを知る機会を提供することも行った。

#### 2.4 「生活とSDGs」の具体的な内容と学生の振り返り

15回の授業では、各回でSDGs17の目標の二つから四つ程度をとりあげ、最終的に全てを網羅できるようにした。本稿では、紙幅の関係で15回全てを掲載することはしないが、以下に4回分の授業の内容を報告する。なお、目標に関しては、重点を置いたものから順に記載することとする。

##### ① SDGs 目標 1, 2, 3, 12—食の貧困とフードロスについて (第3回)

授業への導入として、SDGs.TVの動画の中から、NPO法人セカンドハーベスト・ジャパンの活動を

紹介した動画を視聴。その内容を通して、食のセーフティネットという側面から日本の貧困問題を考えさせた。食の貧困は発展途上国の問題と片付けられがちであるが、実は身近な場所でも起きているということ、フードバンクや子ども食堂、寺のお供えをひとり親家庭に配る試みなど、様々な活動について紹介し、それぞれ個人で協力することができることなども解説した。

さらに、この回の宿題として、各家庭のフードロス調査を実施、消費者庁がウェブサイトで開催しているチェックシート<sup>15</sup>を活用して、学生の家庭のフードロスを記録し考察させ、グループディスカッションを行った。

学生の振り返りには、以下のような記述がみられた。

##### 学生A

“一週間でどのくらい自分の家が食品を処分しているのか、このような課題がなければ気にすることはなかったと思います。どの家庭も共通していたのは、まず食品を処分しなかった家庭はなかったことだと思います。どの家庭も1つ以上の廃棄を出しており、グループ・全体通して多かった理由は食べ残しや保存方法を工夫できていなくて食品が傷んでしまったことが多いと思いました。冷凍保存すればいいというわけではないけど、冷凍していたら食べられた食品が多くあったので、今後冷凍保存できるものはするように心がけていきたいです。夏になりもっと注意しなければいけない季節になるので、家族内でも食品の保存方法や買う量に気を付けたいなと思います。”

##### 学生B

“私の家はどれも期限切れで捨てたものばかりでした。他の人も期限切れか傷んでしまった人が多く、その理由として買ったままどこかに置いて忘れてしまうことがほとんどのようでした。解決方法として期限が近い物を冷蔵庫の手前に置くというのを聞いて、確かにそれなら毎日見ることになるので良いと思い

<sup>15</sup> 計ってみよう！家庭での食品ロス (消費者庁)  
[https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer\\_policy/information/food\\_loss/pamphlet/#leaflet](https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_policy/information/food_loss/pamphlet/#leaflet) (2023年1月3日最終確認)。

sumer\_policy/information/food\_loss/pamphlet/#leaflet (2023年1月3日最終確認)。

ました。また、その意見を聞いて、家計簿に何を買ったかまで記入すれば、お金の管理だけではなく、いつ何を買ったか把握でき、余分に買ったり食べ忘れたりすることを防げるのではないかと考えました。”

#### 学生C

“調理したものを捨ててしまうケースもあったけれど、材料を捨ててしまうことが多いように思った。みんなの意見を聞いて、冷蔵庫の奥に小さいものを入れない、余分を買わない、冷蔵庫のチェック賞味期限のチェックをするなど、日々の少しの心がけで食品ロスは軽減できるのだと思った。また、食品ロスを減らすことはゴミの量を減らすことになり、燃やすのに必要となる燃料の使用料が減り、地球温暖化の原因である二酸化炭素の排出を減らすことができます。燃料の使用料が減ることによって焼却炉の維持管理費も減らすことができ、無駄な支出を減らす効果があるそうです。こうした効果から、改めてSDGsは1つの目標がそのほかの目標と深く関わりあっているのだと感じました。”

SDGsという視点から日常の食生活を考えた結果、単にフードロスを削減することにとどまらず、消費行動の改善、地球温暖化や脱炭素に向けた取り組みにまで考察が及んでおり、教員が当初設定していたねらい以上の成果を得ることができた。

#### ② SDGs 目標 4,5—女子教育とジェンダーについて (第5回)

授業への導入として、発展途上国の女子生徒たちが教育を受けられない現状にあることを紹介した動画を視聴した。その後、教員が解説を行った。

女子生徒が通学できない背景には、経済的な要因があること、親の無理解により就学率に男女差があること、地域の交通インフラが未整備であるため遠隔地にある学校まで徒歩で通学せざるを得ないこと、学校のトイレが危険であること、日中であっても通学途上や学校内で性犯罪の被害者になるなど治安が悪いこと、教員、特に女性教員が不足していること、貧困のため

教材や文房具が買えないことなど、複数の要因が含まれており、ただ学校を作れば問題が解決するわけではないことを理解させた。学生たちは、自分たちが毎日短期大学に通えていることが、世界から見れば決して当たり前ではないことに強い衝撃を受けるとともに、教育を受ける権利や学ぶ姿勢について改めて考察する姿も見られた。

授業実施後の学生の振り返りを以下に引用する。

#### 学生D

“幼稚園、保育園に通って、小学校、中学校、高校、大学と進むのが一般的だと思っているのに対して、字の読み書きすらできない、学べない状態にある子どもがたくさんいるということに驚き、ショックを受けました。また、学校に通えず学びを受けられない→結婚させられる→子どもを産む→収入が少ない→子どもにも教育を受けさせられないという学べない子どもの循環、貧困の循環が起きているのがすごく恐ろしいことだと思いました。学校が安全な場所ではないこと、正しく教育をすることができる教育者がいないこと、男女差別があること、お金がないこと、など様々な問題が重なって起きている難しい問題だと思いました。こんなに余裕のある幸せな生活ができていて自分にできることを探し実行しなければならぬと思いました。”

#### 学生E

“ユニセフでは「子どもにやさしい学校」という取り組みがあった。この活動は教科書や学用品の提供や学校内の環境設備などに力を入れているものだ。この活動をすることで、貧しくて学用品がない子どもでも学校に通いやすい環境をつくれるのではないかと考えた。全ての行動にも費用がかかってしまうのが難点だと思う。でも沢山の企業が少しずつ活動することで目標達成に近づくと感じる。私たちは直接的に関わることはできないが、募金などの小さな援助はできると思うので今後していきたいと思った。”

#### 学生F



“学校に行きたくても行けない、行かせない、女の子は特に通わせてもらえない状況があることに驚きや衝撃を受けた。日本では中学校まで義務教育で私は、高校、短大まで通わせてもらっている。そんな中、帰りたいとか行きたくない、辞めたいということを中心に発して、途上国の人は行きたくても行けないのに、と自分は感謝しなければならないと感じた。女性は結婚するから学校に行かせない、女の子が産まれてその子も「結婚するから学校に行かせない」と育てられてしまうこの循環を深く考えなければならないと感じた。”

授業の冒頭では、ジェンダーに関する課題は学生にとり漠然としたものであったが、女子教育という課題と合わせて提示し考察させた結果、自分たちが置かれた生活環境との違いに気づき、課題の深刻さや大きさをよりはっきりと認識できたようである。

③ SDGs 目標 13, 2, 8, 9, 12, 17—特別講師 豊永翔平氏による講演「気候変動時代における新たな食と農のかたち」(第8回)

前期後半の第8回では、前半の授業で学んだ知識と社会課題を具体的に結びつけることを目的とし、外部講師の豊永翔平氏を招聘した。豊永氏は、沖縄県で環境適応型農業技術開発拠点 Cultivera LLC を展開し、三重県多気郡多気町で農業法人ポモナファームを運営する若手起業家である。

豊永氏の講演の概要は以下の通りである。

現代は地質学的には「人新世」とも称され、人間の経済活動の影響により、地球上の各地で気候変動に起因する異常気象が発生している。例えば、①毎年複数の大型台風の被害が発生、②世界的な干ばつ、③感染症の発生、④超集中豪雨、⑤水不足、⑥世界的山火事、⑦海面上昇、⑧殺人熱波、⑨農業壊滅、⑩死にゆく海、⑪大気汚染、⑫気候難民などである。

一方、世界の人口は増え続けており、国連は2050年には現在の2倍の食糧が必要になると警告しているが、温暖化が進めば進むほど農産物の収穫量は減少するため、飢餓や貧困の一層の

深刻化が懸念されている。

豊永氏は26歳の時に起業し、この6年の間に水の使用を極力抑えた農業技術「Moisculture」を開発した。厚さ5ミリの高密度の繊維層に点滴チューブで水を供給、そこに湿気中根という特殊な根を生やし、従来のような水耕栽培ではなく、湿度で野菜を育てることに成功した。水分ストレスをかけながら育てるため、水の使用量は最大で通常の10分の1程度であるという。豊永氏によれば「アスリートを育てているような」農業技術であり、廃液が出ないため水処理システムも不要で、低コストも実現できる。気候変動による過酷な環境下での農作物の生産を可能にすることは、世界中の飢餓や貧困問題の解決にもつながるとのことであった。

豊永氏から贈られたミニトマトやトマトジュースを手にしなが、学生たちは真剣な表情で講話に聞き入っていた。授業後の振り返りには以下のような記述がみられた。

学生G

“私は小学生の時に宿題でトマトを育てたことがあります。たくさん水をあげた記憶があります。そのため、水を使わずに湿度で栽培をしているということにとっても驚きました。湿度で育てることで水質や土に捉われずに世界中の野菜が作れるので、食糧難の国にもっと広まってこれからの新しい常識になればいいなと感じました。また、多岐にわたってSDGsに貢献していらっしゃる豊永さんの作る農園やシステムを実際に自分の目で見てみたいと感じました。今の豊かな暮らしは、これまで生きて人間たちが築き上げてくれた技術や資源で得られていますが、それをただ消費するだけではなく持続していくための努力が必要だと思います。”

学生H

“2100年の夏の日本の平均気温が40℃以上というのが普通になることが驚きでした。少しでも気温が上がると干ばつや大型台風、大気汚染や水不足、海面上昇など、人間にとってデメリットがとても多い事がわかりました。中学や高校の授業で少しだけ温暖化について

学習したことがありましたが、今回更に詳しく学ぶことができてよかったです。また、日本の農業の現状について知ることができたのもよかったと思いました。農業人口が減っていることは知っていましたが、約 60%に後継者がいないという事を聞いて、想像以上に若い人がなくて、深刻な問題だと感じました。今回のお話を聞いて、私たち 1 人 1 人が普段の生活から色んな事を意識すれば、変えられる未来があると思いました。”

#### 学生 I

“私たちの生活の中の様々な出来事は SDGs に関係しているのだなと思いました。食料危機で言うと、身近の例だと数年前から地球温暖化で海水温が上昇しサンマがとれにくく値段が高騰していることです。毎年秋になるとサンマが食卓に頻繁に並んでいましたが、今では秋シーズン一回出てくるか出てこないかになってしまいました。このように当たり前だったことが変わってしまうのは私達が原因であり、穀物の値上げや食糧危機も私たちが今直面している課題であって、一人一人が意識し改善していくことが一番の近道に違いありません。農業の収入の低さも問題視されていると聞いたので農業全般の働き方や制度も変えていかなければ輸入にばかり頼り、国内での生産が出来なくなってしまうと思いました。私自身も地球環境について沢山の考え方を知っていききたいなと思いました。”

今回の授業では、若手起業家である豊永氏から、地球温暖化を食い止めることが地球全体にとってはや待ったなしの課題であることを直接聞くことができた。さらに、豊永氏が失敗や挫折を経験するもそれに屈することなく商品化にこぎつけた、言わば努力の結晶ともいえるミニトマトやトマトジュースを実際に手に取り味わうという経験を通じ、食と農業の課題解決にむけて行動する姿に直接触れたことは、学生たちに非常に強い印象を与えたようだ。この回の課題は「豊永翔平さんへの手紙」という形式で

提出させたが、どの学生も普段以上に多弁であり、他者の行動に「心を動かされた」経験を語っていた。

なお、この講演は、本学が 2022 年度から全学的な SDGs 教育の推進を掲げていることから、学生だけでなく教職員にも聴講や録画視聴の機会を提供したほか、豊永氏のご厚意により、学生たちの母校である近隣の高等学校にもニュースレター「湘北 SDGs 第 3 号」を通して紹介した。

#### ④ アクティブラーニングで学ぶ—カードゲーム「2030SDGs」<sup>16</sup> (第 14 回)

第 14 回の授業では、2 クラスともにカードゲーム「2030SDGs」のワークショップを体験した。

カードゲーム「2030SDGs」は、一般社団法人イマココラボ<sup>17</sup>が株式会社プロジェクトデザイン<sup>18</sup>と開発したゲームである。イマココラボによれば、2020 年までの 5 年間で 20 か国 30 万人が体験したとのことである。日本国内では、官公庁や企業研修、学校の授業などでも活用されており、個人でもイマココラボ主催の体験会はもとより、公認ファシリテーターが主催するワークショップに参加することが可能である。

ルールは簡単で、与えられたお金と時間を使い、様々なプロジェクトを実行しゴールを目指す。現在から 2030 年までの道のりを体験するものである。多様な価値観を持った参加者が各自のゴールに向かってプロジェクトを実行していく過程で、経済、環境、社会の状況が刻一刻と変化していくことが見えるよう設計されている。

「私たちにはなぜ SDGs が必要なのか」、「SDGs があることでどのような可能性が生まれるのか」を、楽しみながら体験できるワークショップである。

筆者は 2019 年に一般社団法人イマココラボの体験会に参加したことを契機に、2020 年に資格取得講習を受講して「2030SDGs」を主催できる公認ファシリテーター資格を取得した。その後、担当科目である「現代女性の社会学」や「ゼミナール I, II」の授業の中で、アクティブラーニングとして「2030SDGs」を単発で実施してきたが、「生活と SDGs」では、科目全般を通

<sup>16</sup> <https://imacocollabo.or.jp/2030sdgs/> (2023 年 1 月 4 日最終確認)。

<sup>17</sup> <https://imacocollabo.or.jp/> (2023 年 1

月 3 日最終確認)。

<sup>18</sup> <https://www.projectdesign.co.jp/> (2023 年 1 月 4 日最終確認)。

して SDGs を学んできた学生を対象に実施するため、どのような振り返りが出るかに注目していた。

この回の学生の振り返りを以下に挙げておく。

#### 学生 J

“このゲームを通して、SDGs の概要を知ることができました。ゲーム自体も楽しく、班同士で協力しなければ目標達成ができないことがわかりました。思ったことはゲームでも現実でも、環境保護の活動は厳しいのだと感じました。現実世界と一緒に自分の意見を言ったり、相手の意見を聞いたりすることは必要なことだと思いました。全体の状況を理解し合うことで協力することが大切なことだと感じ、全体が動くようになることもわかりました。社会の課題に向き合うことは大切なことだと思いました。次回で最後ですが、SDGs 目標 17 のことを「自分ごと」として考えていけるよう、これからも身の回りをみて行動していきたいです。”

#### 学生 K

“自分の目標を伝える、相手の目標を聞く、状況をちゃんと理解し合うことで協業が可能になることが分かりました。まさに自分たちの組織で起こっていることがそのまま出てビックリしました。単なるゲームにも関わらず、色々考えさせられたし、いろんな気づきをもらいました。全員と直接話をしてなくてもなんだか最後には一体感を味わっていました。なぜ今 SDGs が必要なのかということがよく理解できたし、自分たちの力で世界を変えていける可能性を感じることでできたゲームでした。”

#### 学生 L

“SDGs の授業で経済や環境や社会の問題について考えていて、本当に総まとめの内容で楽しくゲームができました。カードには番号と内容も書いていて、復習にもなりました。自分あまり積極的に他の地域の人たちと交渉をしに行けなかったけど同じ地域の人たちが交渉をしていて、積極性を見習いたいと思

いました。ゲームを通して今までよりさらに環境について興味がわきました。SDGs に関連する自分のできることは徹底して行い、周りの人にも巻き込んで意識を変えていきたいです。”

#### 学生 M

“なにかを獲得するためには別のなにかを失うことになってしまうから、考えることが多くて難しかったです。プロジェクトで、実行したらもらえる報酬の中に環境を増やしてくれるプロジェクトがほとんどなかったのが気になりました。逆に環境を悪くする代わりに社会や経済がプラスされるものが多かったです。たしかに現実でも環境を破壊してなにかを作ったりすることの方が多と思うので、環境を復活させることは大変なのだと感じました。また、技術が発展して経済や社会がどんどんよくなるにつれ、自然が気づかぬうちに破壊されていき、自然が酷い状態になってやっと気づいて改善する意識を持つという現実世界を表しているようで興味深かったです。”

こうしてみると、受講生は、高校卒業後間もない 1 年生で、そのうち約半数は入学時に SDGs を知らない者がいたにも関わらず、テキストや動画視聴、スライドによる解説、グループワーク、特別講師の講演などを組み合わせた約 3 か月間の授業を通して、自分事としての気づきや行動変容への意識の高まりが生じていることを見てとることができる。

以上が「生活と SDGs」初年度の実施報告である。受講者数は 2 クラスで 52 名、学年全体の半数強であった。最終回のまとめの振り返りでは、17 の目標が理解できた次のステップとして、自分も実際の行動に移したいと述べている学生が多く見られ、ボランティア活動への参加など学外に視野を広げている様子がうかがえた。これを受け、2023 年度に応用科目として新たに「SDGs と社会デザイン」を開講することとなった。

(築瀬千詠)

### 3. 授業後アンケートに見る学生の学び

#### 3.1 アンケート調査内容

全15回の授業を終えた後、築瀬担当クラスと二見担当クラスそれぞれで、教育効果の確認のためのアンケート調査を行った。回答は52名の学生のうち40名の学生から得られた。アンケート内容は大きく四つのセクションから構成されている。

一つ目は主に学生の自己評価を測定するための質問項目である。五件法（「5 とても（非常に）そうである」「4 それなりにそうである」「3 どちらともいえない」「2 あまりそうではない」「1 まったくそうでない」）にして回答を求めた。

**Q1.** この授業を受けて、SDGsに関する理解は入学時点と比べてどの程度深まりましたか？

**Q2.** この授業を受けて、SDGsに関する知識は入学時点と比べてどの程度増えましたか？

**Q3.** この授業を受けてSDGsの目標の社会課題を自分ごととして考えられるようになりまし  
たか？

**Q4.** この授業を受けて、日常生活でもSDGsを意識するようになりましたか？

**Q5.** この授業では動画を数多く視聴しましたが、SDGsの理解を深める効果がありましたか？

二つ目は学生の意識の変化を見るための記述式の質問項目である。質問内容は以下の二つである。

**Q6.** 日常生活で、少しでもSDGsを意識するようになったことがあれば具体的に教えてください。

**Q7.** この授業はSDGsの入門編でした。応用編があるとしたらどのようなことをしてみたいですか？皆さんのアイデアを教えてください。（（例）校外学習（見学や体験など）、自分たちで企業などを取材したい、助けを必要としている人の声を聞きたい、等）

三つ目の質問項目は、15回の授業による学生の変化を確かめるために、初回の授業に行ったアンケートと同じ内容の項目を二つ用いた。

**Q8.** 前期終了時点で、SDGs17の目標のうち自分の身近に感じる目標は何番ですか？（複数回答可）

**Q9.** 前期終了時点で、SDGs17の目標のうち自分の遠くに感じる目標は何番ですか？（複数回答可）

最後に、自由記述欄を設け、学生たちの自由な意見を求めた。

**Q10.** （自由記述）授業に対する感想や意見などがあれば書いてください

以上、10項目から構成されたアンケートの回答をもとに、15回の授業を受けた学生の変化と学びを検討する。

#### 3.2 アンケートに見る学生の学び

本項では、Q1からQ9までのそれぞれの回答結果とその分析を、適宜Q10の自由記述を引用しながら行う。

まずQ1からQ5の5段階の質問項目について、以下のような結果が得られた。

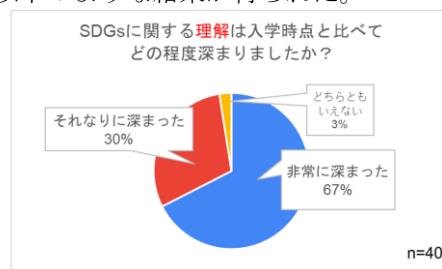


図2 授業後アンケート Q1

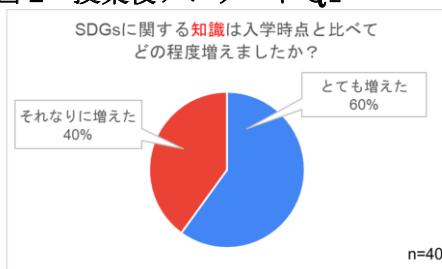


図3 授業後アンケート Q2



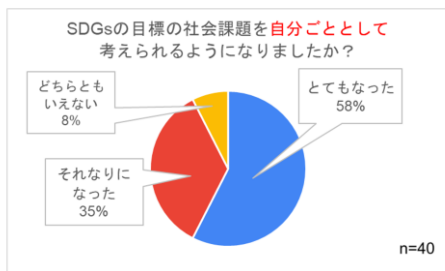


図4 授業後アンケート Q3

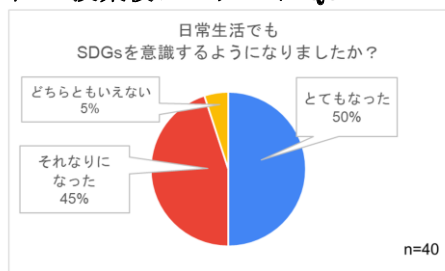


図5 授業後アンケート Q4

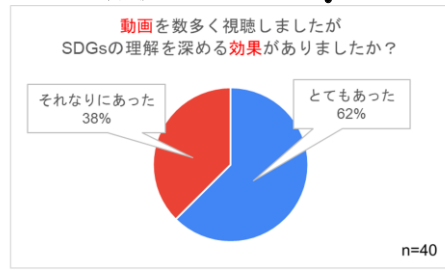


図6 授業後アンケート Q5

図2および図3からは、9割を超える学生がSDGsについて理解が深まり知識が増えたと感じていることがうかがえる。

また、図4と図5を見るに、9割を超える学生が、SDGsの課題を自分事として捉え、日常生活の中でSDGsを意識するようになったと感じている。日常生活における意識の変化について、Q6におけるアンケートから、どのような変化があったのかを詳しく見ていきたい。

学生 N

“街中にある SDGS の表や図に目がとまるようになり、「あ、このお店はこれに貢献してるんだ、じゃあ、ここに行ってみようかな」など SDGs を意識するようになった。”

学生 O

“買い物をするときに、ものを選ぶ基準や、買う量、期限が短い手前ものから取るなどを今まで以上に意識するようになった。”

これらの回答は、学生たちがエシカル消費を学

び、自身の消費活動における意識が変化したことを示している。また、消費活動だけでなく日常生活の行動が変化した例も挙げられた。

学生 P

“湘北短期大学でペットボトルを捨てるときに、ラベルとキャップを分けて捨てる取り組みが行われているので、積極的に貢献できるようになりました。”

学生 Q

“家にいる時は一か所以上でエアコンを使わないように家族に言ったり、自分でしたりしています。”

行動の変化というわけではないが、日常生活の中で、これまでと見えている景色が変わった、意識が変化したという意見もあった。

学生 R

“電車や街中にある SDGs のマークに反応してしまう。”

学生 S

“今まで黒人や障害者に対して偏見を持っていたけれど、今は、こういう人もいるな、と思えるようになった。”

上記のような差別に関する意識については、自分が「あたりまえ」だと思っていたことが、授業を通して差別にあたるものだと気づきなおしたという声もあった。また、興味深いのは次の記述だろう。

学生 T

“アルバイト先での廃棄の量などを意識するようになった。”

この意見は、市民としての日常生活だけでなく、アルバイトではありながら職業人として働く中でSDGsを意識するようになったという意見である。これらの記述の結果からは、甲斐荘が示した消費活動を行う市民にとどまらず、「社会を支え、改善していく資質」が育まれていると見ることができる。

Q5の検討に先立って、Q8とQ9からも、学生の受講前後の意識の変化を分析したい。

まず次に示す図7は、Q8の自分にとって身近に感じる目標である。上の数字が受講前、下の数字が受講後のそれぞれ人数である。

7	5	13	6	15	5	4	8	0	5	13	13	7	15	5	7	1	4
3	5	9	6	15	5	9	4	3	10	14	28	15	12	11	8	3	0

図7 自分から近いと感じる目標

全体としては、どの項目も身近に感じないという学生がいなくなり、すべての項目に身近だと感じる学生がいるようになった。個別に見ると、特に「目標12 つくる責任つかう責任」と「目標13 気候変動に具体的な対策を」が大幅に増えた項目である。一方で人数が減少したのは、「目標1 貧困をなくそう」「目標8 働きがいも経済成長も」であった。

次いで以下の図表8は、Q9の自分にとって遠くに感じる目標である。

9	13	2	5	1	16	3	5	14	5	0	2	7	3	2	1	4	4
16	13	0	7	1	13	6	7	9	4	1	0	3	0	0	3	4	2

図8 自分から遠いと感じる目標

表7から、「目標3」「目標12」「目標14」「目標15」について、それぞれ自分から遠いと感じる学生が0人になっている。一方で、「目標1 貧困をなくそう」については、遠いと感じる学生が大きく増加している。これらの変化をどのように見ればよいだろうか。

まず、「目標12」を身近に感じる学生の増加については、Q6のアンケートの記述を通して見ること、日常の消費活動やアルバイトなどの労働と目標がつながっていることを理解した学生が多いからであると分析できる。改めて学生たちが、きちんと目標番号と照合して理解していたことも確認された。続いて「目標13」を身近に感じる学生が増え、「目標14」「目標15」を遠くに感じる学生が0人になったことについては、豊永氏の講演が大きく影響していたことがうかがえる。最後に「目標1」を身近に感じる学生が減り遠くに感じる学生が増えたことについて、一見すると、学生たちの意識が後退して

いるかのように見受けられる。しかしながらこの意識変化は、各回のコメントシートを見るに、学生たちが視聴覚教材を通じて開発途上国における絶対的貧困の問題を目の当たりにし、自分たちの生活とのギャップを突き付けられた衝撃によるものであるとかがえる。「目標1」について遠くに感じるということは、それだけ問題が大きなものであり、自分たちの想像も及ばなかった世界について理解を深められたことの証左として読み取ることができる。

最後に「Q7. この授業はSDGsの入門編でした。応用編があるとしたらどのようなことをしてみたいですか」という設問に対しては、以下のような回答が見られた。

学生U

“目標に達成に向けて取り組んでいる人や企業のお話を聞いてみたい。”

学生V

“SDGsに貢献しようとしているけれど、やり方がわからない企業や個人の店に行き、SDGsとお店を関連付ける手助けをしに行く。”

これらの回答からは、学生たちが実際に社会で課題に取り組む、あるいは課題に直面しているひとたちと、つながりたい思いや力になりたいという思いが読み取れる。すなわち、SDGsの各項目について知識・理解を深めることにより、学生たちの社会課題に取り組もうとする姿勢が涵養されていたことを読み取ることができるのである。

以上のアンケート結果からは、学生たちが単に知識を得るだけでなく、また消費者として成長するのみにとどまらず、自身の日常生活とSDGsの各目標を繋げて思考し、問題の解決に向けて自分の日常の範囲から行動する市民としての素質を育んでいたことが示された。

### 3.3 アンケートに見る学生の学びを促進した要因

このような学生の学びを促した要因は何にあったのだろうか。学生たちの学びに、視聴覚教材が大きく寄与していたことは、図6から明らかである。学生の自由記述からの意見にもその

様子が伺える。

学生 W

“資料動画を見るのが学びにもなるし興味深い内容のものが多く、企業や法人が作っているしっかりとした動画だった。ナレーションが聞き取りやすかったり、字幕が分かりやすく見てやすかった所が良かった。”

また、Q8 と Q9 の分析でも見えてきたことだが、豊永氏の講演も学生の意識の変化に大きく影響を与えていた。

学生 X

“豊永さんの講習会で気候変動について詳しく教わり、身近な問題に感じたり、興味が湧いたので詳しい内容を理解することが大切な事に気づきました。”

興味深いのは、「詳しい内容を理解すること」が「身近な問題に感じたり、興味が湧く」上で重要だと述べている点にある。基礎をしっかりと深く学ぶことが、学生たちの意識の変化につながっていることを示している。

学生 Y

“ゲーム形式で学ぶ事は本当に効果的だと思いました。実際に自分で考えて、行動して、助け合ってより SDGs を身近に感じる事が出来ました。”

2節でも確認したが、ゲームを通したアクティブラーニングによってより SDGs を身近に感じた学生もいた。

以上のことから、視聴覚教材や専門家の講演、アクティブラーニングなど、様々なアプローチによって、学生たちの意識が変化したことがわかった。単一の教材や授業にとどまらず、学生たちが触れる情報の質を高めることや直接体験することが、学生たちの興味関心を大きく高め、課題に取り組む姿勢を育むことが、これらの結果から示されている。

(二見総一郎)

## 4. 結論

第1節では、短期大学における SDGs 教育の意義について、文部科学省の資料および先行研究に基づき検討を行った。すなわち、短期大学の教育課程において、SDGs の基礎的な「スキルとコンピテンシー」、「知識と理解」を深く修得させることは、「自分事としてとらえること」や「その解決に向けて自ら行動を起こす力があること」につながり、「21 世紀型市民」「持続可能な社会の創り手」の育成に大きく寄与すると考えられる。続く第2節では、湘北短期大学の2022 年度前期新規科目である「生活と SDGs」の授業実践を概観し、第3節においてその授業後アンケートから、実際に学生がどのような学びをし、何が影響を与えたのかを確認した。学生たちは、ただ SDGs に関する基礎的な知識を得たにとどまらず、自身の日常生活と SDGs の各目標を繋げて思考し、社会課題に取り組もうとする姿勢が涵養されていた。これらの学生の変化の背景には、座学のみでなく、視聴覚教材の使用や外部講師による講演、ゲームなどを用いたアクティブラーニングなど、多様な学びの形態が学生の学びの質を高めたことが影響していた。

本研究は、短期大学において SDGs の基礎的な教育を行うことの意義について検討してきたため、今後は、短期大学で応用的な教育を行うことの意義と可能性について実践に基づいた研究を行うことで、短期大学における SDGs 教育の可能性をより広げることにつながると思われる。湘北短期大学生生活プロデュース学科では、2022 年度の実践および本研究を受け、2023 年度より、1 年前期の「生活と SDGs」の必修化および1 年後期の新規選択科目であり SDGs に関する応用科目である「SDGs と社会デザイン」の創設を行い、より SDGs 教育を推進する予定である。「SDGs と社会デザイン」の内容としては、授業後アンケートの Q7 で学生が挙げた応用的な内容も積極的に取り入れながら、短期大学において SDGs の応用科目を教えることの意義と可能性について検討することで、さらに研究を進めていきたい。

(二見総一郎)

The Significance of SDGs Education at Junior Colleges:  
From the Classroom Practice of "Life and the the SDGs"

Chie YANASE, Souichirou FUTAMI

**【Abstract】**

The significance of SDGs education at junior colleges was examined using data from the "Life and the SDGs" class practice at Sony Institute of Higher Education Shohoku College in FY2022 and post-class questionnaires. Prior to the review of the data, based on the data from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) and the International Commission for UNESCO-Japan, as well as previous studies, we found that deep acquisition of basic "skills and competencies" and "knowledge and understanding" of the SDGs in the curriculum at junior college will lead to the students "perceiving social issues as their own affairs" and "being able to take action to solve them," and that the students will be "able to take action for their own benefit". This will contribute to the development of "21st century citizenship". Through "Life and the SDGs," students not only gained basic knowledge about the SDGs, but also developed an attitude to think about and tackle social issues by connecting their own daily lives with the SDGs. These changes in the students can be attributed to the fact that the quality of their learning was enhanced not only by classroom lectures, but also by various forms of learning, such as the use of audiovisual materials, lectures by outside instructors, and active learning through games and other activities.

**【Keywords】**

SDGs, ESD, junior college, educational practices, sustainable society, active learning